

<p>①事業名 (事業計画実施年度)</p>	<p>【1】ナショナルバイオリソースプロジェクト (ラット・ショウジョウバエ)</p>
<p>②主管課及び関係課(課長名)</p>	<p>(主管課) 研究振興局ライフサイエンス課 (課長: 松尾 泰樹)</p>
<p>③施策目標及び達成目標</p>	<p>施策目標4-2 ライフサイエンス分野の研究開発の重点的推進 達成目標4-2-3 ライフサイエンス研究に必要な研究基盤を整備する。そのための手段として、ライフサイエンス研究の基盤となる生物遺伝資源(バイオリソース)及びそのゲノム情報について、戦略的に収集・保存・提供を行う体制の確立等を行う。</p> <p>(関連) 施策目標5-3 科学技術振興のための基盤の整備 達成目標5-3-1 2010年を目途に、知的基盤整備計画(科学技術・学術審議会阿部前会長より遠山大臣に平成13年8月30日に答申)に記載された重点的に整備する知的基盤(①研究用材料(微生物等の生物遺伝資源等)、②計量標準、③計測方法・機器等、④データベース)の整備について、⑥指標に示されているような整備目標を達成する。</p>
<p>④事業の概要</p>	<p>ライフサイエンス研究の基盤となる生物遺伝資源(バイオリソース)については、国の戦略的な目標に基づき、体系的な収集・保存・提供を行う体制の整備確立を図る。具体的には、生物種等の対象ごとに拠点を整備するとともに、バイオリソースの所在情報や各リソースの遺伝情報等を提供する。これらにより、「国が重点的かつ主体的に整備すべきバイオリソースについては、2010年時点で世界最高水準の目標に達する」という戦略的な目標を視野に入れつつ、平成18年度における保存数・提供数を設定し、年次計画に基づき、各リソースの体系的な整備を行う。</p>
<p>⑤予算総額及び事業開始年度</p>	<p>平成19年度概算要求額: - (平成18年度予算額: 400百万円) 事業開始年度: 平成17年度</p>
<p>事業開始時又は事前評価時において得ようとした効果</p>	<p>「国が重点的かつ主体的に整備すべきバイオリソースについては、2010年時点で世界最高水準の目標に達する」という戦略的な目標を視野に入れつつ、平成18年度における保存数・提供数を設定し、年次計画に基づき、各リソースの体系的な整備を行う。</p>
<p>⑥事後評価 得られた効果(波及効果を含む)及び得ようとした効果との比較・検討</p>	<p>平成17年度においては、実施機関における体制の整備も進み、生物遺伝資源の収集・保存・提供は着実に実施されている。また、これらの提供されたリソースを利用した研究も推進されており、ライフサイエンス研究の戦略的・重点的な推進に資している。具体的には、ラットについては、目標保存系統数285系統に対し336系統、目標提供系統数80系統に対し195系統が達成されており、保存系統数、提供系統数ともに平成17年度の達成目標を超えている。また、ショウジョウバエについては、目標保存系統数32,710系統数に対して29,913系統、目標提供系統数11,100系統に対して37,370系統が達成されており、保存系統数は達成目標の91%まで到達しており、提供系統数は達成目標を超えている。</p>
<p>効率性</p>	<p>【事業に投入されるインプット(資源量)】 ラットの拠点とショウジョウバエの拠点(各1)に対し、平成14年度以降、約11.3億円の予算を投入。</p> <p>【事業から得られるアウトプット(活動量)】 平成18年3月末現在、ラットについては、目標保存系統数285系統に対し336系統、目標提供系統数80系統に対し195系統が達成されており、保存系統数、提供系統数ともに平成17年度の達成目標を超えている。また、ショウジョウバエについては、目標保存系統数32,710系統数に対して29,913系統、目標提供系統数11,100系統に対して37,370系統が達成されており、保存系統数は達成目標の91%まで到達しており、提供系統数は達成目標を超えている。このため、総合的に見ると、当初の目標よりも効率的に事業が行われていると言える。</p> <p>また、バイオリソースについては、「科学技術基本計画」(平成13年3月閣議決定)の具体的な推進方策を示した「分野別推進戦略」(平成13年9月総合科学技術会議)において、生物遺伝資源の収集、供給等の機能は、長期間にわたり継続することが必要であり、国家として対応することが必要であるという観点から、継続的かつ効率的に事</p>

	業を実施している。	
有効性 (上位目標の達成に貢献したか)	<p>バイオリソースの収集・保存・提供等を行いつつ、バイオリソースの質・量の向上を図ることは、実験結果の再現性や定量性を確保し、ライフサイエンスの発展に寄与するものである。その意味で、ナショナルバイオリソースプロジェクトを通じて、国としての戦略的に整備すべき種のバイオリソースについて、体系的に収集・保存・提供することが可能になったことにより、ライフサイエンス研究推進にとっては、非常に大きな効果があったと考えられる。</p> <p>なお、平成18年度に本事業を達成することにより、2010年時点で世界最高水準の質と量を目指したバイオリソースの体系的な収集・保存・提供するための体制整備への一層の貢献が期待される。</p>	
評価結果	想定どおりの効果が得られた。	
⑦ 評価に用いたデータ・情報・外部評価等	<p>各リソースの主なユーザーである国内研究者等外部有識者から構成される委員会において研究ニーズや各リソースの個別事情を勘案して設定された、平成18年度における収集・保存・提供数の目標値に向けた年次計画の実現状況。</p> <p>プロジェクトに設置している評価委員会が年度ごとに行う進捗状況評価結果 (A+, A, B, C, Dの5段階評価)。</p>	
⑧ 今後の政策への反映方針 (継続の適否、改善点を含む)	<p>リソースの収集については順調に進捗しているが、さらに系統的、体系的に収集するとともに、第3期科学技術基本計画 (平成18年3月閣議決定) において、量的観点のみならず、質的観点も踏まえ、2010年までに世界最高水準を目指して整備すると挙げられているように、利用者からの意見の反映等を通じて、ニーズに合った高品質のリソースの収集・保存・提供を目指すとともに、ライフサイエンス研究に必要な研究基盤としての位置づけを踏まえ、プロジェクト期間終了後の体制についても基本計画の示す目標を目指し、継続的に事業を展開する必要がある。</p>	
⑨ 得ようとする効果	平成18年度は	⑩ 達成年度
	<ul style="list-style-type: none"> ・ラット 保存系統数405系統 (累積数) 提供系統数100系統 (単年度) ・ショウジョウバエ 保存提供数36, 300系統 (累積数) 提供系統数16, 100系統 (単年度) <p>を目標として、生物遺伝資源を体系的に収集・提供・保存する体制を確立する。</p> <p>これにより、2010年時点で世界最高水準の質と量を目指したバイオリソースの体系的な収集・保存・提供を行うための体制整備が推進される。</p>	平成18年度
⑪ 備考	<p>我が国の科学技術政策の基本的な方向性を定めた「科学技術基本計画」(平成13年3月閣議決定) において、生物遺伝資源を含む知的基盤の重要性が指摘され、同計画の具体的な推進方策を示した「分野別推進戦略」(平成13年9月総合科学技術会議) において、生物遺伝資源の収集、供給等の機能は、長期間にわたり継続することが必要であり、国家として対応することが必要であることが指摘された。このような指摘を踏まえ、知的基盤整備計画(平成13年8月科学技術・学術審議会答申) において、「国が重点的かつ主体的に整備すべきバイオリソースについては、2010年時点で世界最高水準の目標を達成する」ことが提示された。これにより、同方針に基づき、平成14年度より「ナショナルバイオリソースプロジェクト」が開始された。</p> <p>平成18年3月に閣議決定された第3期の「科学技術基本計画」においては、生物遺伝資源を含む知的基盤について、量的観点のみならず、利用者ニーズへの対応の度合いや利用頻度といった質的観点を指標とした整備を行い、2010年に世界最高水準を目指すこととされており、今後は、これを踏まえた取り組みが必要である。</p> <p>また、平成18年度概算要求時の総合科学技術会議による優先順位付け (SABC) においてはA評価を受け、「本施策は平成18年度が最終年度であるが、ライフサイエンス研究の基盤の整備を目指すものであり、科学技術連携施策群 (ポストゲノム) のもと、関係施策と密接な連携をとりつつ、長期的な展望の下で実施することが重要である」との指摘を受けた。</p>	